

蛟堂報復録 9

鈴木麻純 Masumi Suzuki



アルファポリス文庫

地獄の沙汰も金次第――

業を背負う覚悟と金があるのなら――
その恨み、蛟堂に預けてみませんか？
悪いようには致しません。

「一週間以内に、」

――必ずや片を付けてみせましょう。

蛟堂店主 三輪辰史

目次

最終話 黒塚くろつか

7

番外一 ルンペルシュテイルツヒエン

243

番外二 茨いばらの姫と塔の龍

313

最終話

黒塚^{くろづか}

プロローグ——龍は、懸念する

因縁の鬼女面——

けれど、これは一つのきっかけでしかない。

天月比奈の部屋である。

安達ヶ原に棲む鬼女の狂気と悲哀が込められた面を掌で撫でながら、三輪辰史は考えていた。昨晩から食事もそこそこに、ソファに身を沈めて鬼女に秘められた思念の世界と、これから明らかにされる真実に思いを馳せていた。

一度は共に祖父の許で学んだ従兄と、こうして命のやり取りをするまで憎しみ合うと

いうのは、自分のことながらどこか不思議な気分だった。他人の争いには、散々折り合いつけてきたが。

「こうして当事者になってみると、自分の手で片を付けることがいかに難しいかよく分かる」

相手の不幸を願うことは容易い。けれど運を天に任せるわけでもなく、自らの手で陥れるとなれば話は別だ。喧嘩の記憶も懐かしい。蛟堂で共に学んでいた頃から陰悪だった従兄との仲だが、当時は今ほど殺伐としていたわけではなかった。二人とも酷く子供じみていた。軽口の応酬。手を出したとて、小突く程度のことだった。

今更のようにそんなことを思い出してしまうのは、自分の選択で一人の人間の人生を終わらせてしまうことに恐怖しているからかもしれない。或いは、報復屋としてのプライドが私闘をよしとしないためかもしれない——なんにせよ、胸の内には憤怒や決意とは別に、躊躇が存在することを認めなければならなかった。

辰史は小さく溜息を吐いた。自分は存外、感傷的な人間だ。そうして妙な情に流され続け、一方できちんと向き合うことも億劫がってきたからこそ、今こうして現実には煩わされている。

そんなことを考えていると、後ろから比奈が腕を回してきた。首筋を撫でていく手は、

ひんやりとして冷たい。まだ本調子ではないのだろう。退院してからも付きっきりで御霊の気を整えてはいるが、一朝一夕で戻るものでもない。抱き締めるように自分の胸の前で組まれた彼女の白い手に、辰史はそっと手を重ねた。

（以前なら、俺のことなんか気にせずに休んでいろと言っていただろうな）

それが最善だと信じて、なんにも知らせないことで守った気になっていただろう。間違っても、比奈に助けを求めたりはしなかった。

実を言えば、今もこの恋人を巻き込むことへの不安はある。そうした過保護さは彼女を想う長い年月の中で培われてきたもののなので、やはりすぐにどうこうできるものではない。が、彼女が抱いていた怖れ——知らされないことの不安と、頼りにされないことの寂しさを知った今となつては、無理に療養を勧めようとは思えなかった。

比奈の手が微かに震えている。気付いて、辰史は重ねた手に力を込めた。

「大丈夫だ。俺には、お前がいる。そのことだけは忘れたりしない」

比奈に、そして誰よりも自分に言い聞かせる。

「丑雄との決着を付けたら、次は実家だ。これまでのように『俺が当主になったら』なんて未来に逃げることもやめる。自分から動いて、お前との仲を認めてもらえるようにする」

そうだ。解決しなければならぬ問題は、まだ山積みになっている。目先の決着だけ片付ければ終わりというわけでもない。まして丑雄と相打ちになるなど——と考えて、辰史はかぶりを振った。

（相打ち？　なにを有り得ないこと考えてんだ、俺は）

いつの間にか、弱気になってしまっている。

「辰史さん」

耳元に熱を感じて、辰史は首を廻らせた。

すぐ横にあつた比奈の顔を見つめる。煮え切らない態度のせいで不安な思いをさせてしまっているだろうと思ったのだが、彼女は意外にも落ち着いているようだった。ただ、不思議なことに瞳だけが赤く染まっていた。平静さと矛盾したその感情の発露を、辰史は少しだけ訝った。

「大丈夫です」

比奈が耳元で囁いた。

「そんな風に焦らないでください。私は、大丈夫ですから」

「比奈……」

「今までは、無事を願って待つばかりでした。なんにもできないことをもどかしく思いな

がら、自分から一步を踏み出す勇氣も持てなかったんです。でも、こうして辰史さんが目的を明かしてくれた。不本意ではあるでしょうけれど、御霊を頼つてもくれた。力があつてよかったと思えたのは、初めてなんです。狐憑きでよかったと思えたのも」

その言葉を聞いた御霊が、床からのそりと這い起きた。赤い目には、非難の色がある。「ごめんね、御霊。いつも助けてくれることには感謝しているのよ」

静かな声で謝りながら、恨みがましげな目で見上げる狐の額を撫でている。辰史はしばし言葉を失った。力がある。彼女は、今まで一度だってそんな言い方をしたことはなかった。

「それはまた、随分——」

らしくない。

もしものときには御霊を助けに寄越してほしい。確かにそう頼みはしたが、その約束を繰り返しているだけにしては声に熱があつた。決着の時を前に、彼女も昂揚しているのか？

——いや、そうではないのだろう。

密かに自答して、辰史は情熱的な赤の奥にある真意を探った。これまで守ることにばかり必死になって、比奈の意思を蔑ろにしてきた。一方で、四年という歳月をかけて関

係を築いてきたことも事実である。少なくとも性格は、それぞれ相手の方が理解している。他人の心情を汲み取る力に欠けると言われる辰史にしても彼女だけは例外で、こういったときの比奈がしばしば予想外の行動に出ることを知っていた。

「なにか考えがあるのなら、教えておいてくれないか」

いつだって信じるという言葉で縛って、勝手にしてきたのは自分である。それがたった一度の謝罪で帳消しになるとは思わない。彼女にも、同じように好きにする権利はある——そう言われてしまえば返す言葉もないが、辰史は不安に思わずにはいられなかった。

とはいえ、比奈としても妙な隠し事で再び二人の距離を遠ざける気はなかったのだろう。「すべてを辰史さんに押しつけて、辛い思いをさせることはしたくないんです」

偽りのない胸の内を告げてくる。思い遣りの含まれた言葉の中に、なにか薄ら寒いものを感じてしまったのは、その声が近すぎたせい。まるで秘め事を打ち明けるような調子で、比奈はひっそりと囁いた。

「私だって思念世界に介入することはできます。いつもの辰史さんと同じように——」

「同じように？」

「間に入って幕を引くくらい、わからないことです」

幕を引く。

終わりにする。なにを？

その言葉の意味を考えて、辰史はぎくりと表情を強張らせた。

「駄目だ！」

反射的に叫んで、覚悟を決めているらしい恋人の目を見つめる。

「そんな覚悟をさせるためにお前を頼ったわけじゃないんだ。仮に向こうで事故ったとしても、御霊だけを送ってくればそれで事足りる。妙なことは考えないでくれ」

一瞬、辰史は比奈の自棄を疑った。が、そうではないようだ。

「勿論、それで事足りる事態であればそうします。でも、もしものときに私がどうするつもりでいるのかだけは知っておいてください。この前も言ったとおり、私たち——」
言いかけてから比奈は、いえ、と言いつ直した。

「私には、優先順位があるんです。絶対に勝ってください、戻ってきてください、と辰史さんに約束を強要するつもりはない。けれど、ただ指を咥えて日常が戻るのを待つつもりもありません」

言葉の激しさとは裏腹に、声は穏やかだった。優しくかった。

「たとえば思念世界で待っている真実が辰史さんを裏切るものであったとして、辰史さ

んが手を下すことと私が手を下すことを秤にかけたとき、少しでも辰史さんの傷が浅くて済む方を選びたいと思っています。御霊の力を借りれば、それを知ることくらいわからないから」

比奈はこの上なく冷静だ。決着を付けると決めて猶、従兄との永遠の別れを予期して躊躇している自分とは比べるべくもなかった。辰史が絶句していると、彼女はようやくいつものように申し訳なさそうな顔をしてみせた。

「困らせてしまつてごめんなさい。でも、騙し討ちのような真似はしたくなかったので……」

「騙し討ちって。怖いこと言うな、お前」

どこか気の抜けた感想になつてしまったが、茶化そうと思つたわけではない。ただ、そうとしか言いようがなかった。それだけの話だ。その告白を過激な愛情表現だと喜ぶほど前向きにはなれなかったし、かといって胸の内を素直に打ち明けてくれた彼女を責める気にもなれなかった。

結局のところ、比奈の言うとおりなのだろう。優先順位を決めるべきだ。後悔をしなために。そう口の中で唱える辰史の耳に、恋人の懸念が聞こえてくる。

「私にしてみれば、辰史さんの優しさの方が怖いですよ」

彼女の感覚はやはり、どこまでも他とは違うようだった。

一・時間の狭間に

さてそも五条あたりにて 夕顔の宿を訪ねしは
 日蔭の糸の冠着し それは名高き人やらん
 賀茂の御生に飾りしは 糸毛の車とこそ聞け
 糸桜 色も盛りに咲く頃は 来る人多き春の暮れ
 穂に出づる秋の糸薄 月に夜を待ちぬらん
 今はた賤が繰る糸の
 長き命のつれなさを
 長き命のつれなさ 思ひ明石の浦千鳥
 音をのみひとり泣き明かす

「――音をのみひとり泣き明かす」

がらんとした空間の中で、自分の声だけが空虚に響く。

鬼女が謡った糸繰り唄。勝負が有利に運ぶなにかが隠されているのではないかと調べたそれは、何度か読み返すうちに暗記してしまった。とはいえ、そこに感傷以外のものを読み取ることができなかったのだ。

向いていないな、と丑雄は思う。自分には物語と同化した思念を読み解く才能がない。物語を愛し、物語の登場人物になった気である思念に根気強く付き合う才能。あの辰史にばかりそれが備わっているというのは、何度考えても意外だった。

少し視線を上げて、右腕に巻いた腕時計を眺める。辰史が身につけているような、特殊な構造をしたものではない。安すぎもせず、かといって必要以上に高すぎることもない。シンプルかつ機能的なことだけが取り柄だが、こだわりを持たない人が購入しようと思ひ立つようなものでもない。そんな、腕時計である。

丹塗矢丑雄の身の回りには、そんなものが多い。

信念をもってそれらを選んでいるわけではないが、なにも考えずに買ったわけでもないで、結果的にはそれなりにこだわっていることになるのだろう。手軽な値段であっても壊れやすければ意味がない。たとえば時計にしても、すぐに時間がずれてしまうようであれば本末転倒である。時は金なり。なにもかもを金に換算するのは好きではないが、一分や二分のずれも積もり積もれば何時間、何十時間の無駄になる。なにより、ず

れた時間を過ごすことが酷く落ち着かないのだ。

そんなことを考えながら、丑雄はあたりを見回した。

辰史が指定してきた廃ビルである。入り口には、雨風に晒されぼろぼろになったテナント募集の貼り紙が、辛うじてまだ残っていたような気がする。近日中に解体工事が始まるらしい——とは、外に立てかけられていた看板が告知していた。

決着は思念世界で付けるのだから、こんな場所を選ぶ必要はないはずだが——
(まあ、それがあいつのこだわりなのだろう)

溜息を吐く。そういえば、あの従弟は妙に形にこだわるようなところがある。思念世界の現出においてもそうだが、つくづく気が合わない。仮にその時計が正確でなかったとしても、デザインが気に入っていればそのまま使い続けるタイプだ。周囲が自分に合わせればいいとも思っているのだろう、恐らく。もしくは、時間など携帯電話で確認すればいいと考えているのかもしれない。

時計のことは、ともかく。

少し頭を振って、また別の思考に没頭していく。

結局のところ、丑雄は物語よりも現実に近い思いを馳せる方が好きだった。過去、現在、そして未来。三つを並べて、どうすることが最良かを考える。同じ失敗をしないよう。

後悔をしないよう。

そう、後悔。それこそ丑雄が囚われがちな感情だった。そのため、過去を繰り返さないようにと定めた道に固執しがちであるとは妻から指摘されたことがある。

過去——

改めて、考える。過去はすべての端を発するものだ。

三輪尊という人がいて、その娘である母がいて、自分たちがいる——いや、辰季はいないが。

三輪尊には何人かの兄弟がいた。あるとき、弟夫婦が事故で亡くなり、娘一人が残された。尊は彼の娘を引き取り、一人娘である華緒の妹として育てた。尊はその娘にも分け隔てなく、実子同様に接したようである。やがて成長した娘は丹塗矢家に嫁ぎ、丑雄と辰季を産んだ。

そんな事情があったから、丑雄の母は育ての親である尊に絶大な信頼を寄せていた。彼を敬い、一族の長としても親としても愛していた。

彼女は十年前、『黒塚』の事件が起きたのちに病で死んだ。辰季の死後から、たびたび体調を崩して床に臥しがちではあった。その中で、丑雄が尊に反発して戻ってきたこ

とは、弱りきった彼女の心にいつそうの負担となったようだった。

母の四十九日が終わってから、父は丑雄に家督を譲り隠居した。母に苦勞させたことだけでなくこのことも丑雄を悩ませた。そんな父の判断に、一族の長老たちは当然のごとく反対した。尊の兄弟、従兄弟、又従兄弟といった悪しき慣習に縛られた頭の古い連中だ。彼らのことは丑雄も苦々しく思っていたが、一族の内に生きる以上、ある程度は我慢しなければならぬことも分かっていた。

——まだ丑雄が嫁も迎えていないのに、時期尚早だ。

彼らは毎日のように丹塗矢家に足を運んでは説得を試みたが、父は頑として退かなかった。丑雄自身は母の死に責任を感じていたせいもあって、父から見捨てられたような気になった。結局のところ、長老連が折れる形で決着はついた。とはいえ当主が独り身とあつては体裁が悪いということで、すぐに見合いの席が設けられた。相手は三輪家とも付き合いの深い、山の民を祖とする一族の娘だった。名を、羽黒伊緒里という。

山の民とはかつて異教を信じた人や修験道に通じていた人のことで、羽黒家は今でこそ名家と位置付けられてはいるが、高天のような一族に比べると家格が落ちるという点で三輪一族と同じであつた。互いに力のみを頼りに成り上がってきたため、両一族は盟友のような関係が続けていた。以前から縁戚関係を結ぼうという話も出ていたとのこと

で、一族本位とした双方の考え方が透けて見える縁談であつた。

内心では虚しさを覚えつつも、丑雄はその縁談を受け入れた。逆らう気力もなかったと言った方が正しい。当時は秋寅なども随分と同情して、上海に逃亡してくるようにと勧めてくれた。が、彼のように他に家を継ぐ兄弟のいない丑雄は、どうしても家を捨てる気にはなれなかった。そんな丑雄を救ったのは、皮肉にも妻となった女だった。伊緒里は丑雄より六つも若かったが、沈んでいた丑雄を、献身的な愛情でもって支えてくれたのだった。

そうして、妻帯してから一年。

立ち直った丑雄は、ふと弟の死について調べてみたくなつた。折しも母の一周忌。法要で皆が慌ただしくしている中、火雷を使つて尊のアルバムを手に入れることは難しくなかつた。

当日の尊は、三輪一族の総領としてひっそりなしに挨拶に訪れる人の相手をしていた。それに、その当時はもう家のことを三郎に任せて報復屋の活動に専念していたから、邸の自室に籠もるといったこともなかつたのだ。

それから一年を費やして、思念を読み解いた。自らの正義を曲げてまで掴んだ真相は丑雄を苦しめるものでしかなかったが、それでも知らないよりはましだった——と、今

では思う。

(そういえば、秋寅はあのアルバムを戻してくれたのだろうか)

不意に気になって、へらへらした従弟の顔を思い浮かべる。

すべてを秋寅に打ち明けたのは、弟の死の真相を知ってすぐの頃だった。真相を、祖父の卑劣さを、丑雄は憎んだ。一方で、それを怖れもした。途方もない嫌悪と拒絶が怒りに勝って、しばらくは本家を訪ねていこうとするだけで足が震えた。持ち出したときと同様に返そうとしたが、飛ばそうとするたび、式神は式符に戻ってしまった。『安達ヶ原』の女がナイフを自らの喉に突き立てた瞬間を目にしまったときのように、怖れに支配され身動きできなくなっていたのだ。しかし、アルバムをいつまでも手元に置いておきたくもなかった。

ジレンマに悩まされるあまり体調を崩した丑雄を心配して、妻が秋寅に連絡をした。それは、丑雄にとって人生の中でも五指に数えられるほど不名誉な救援要請だった。いくら弱り切っていたとはいえ、よりにもよってあの従弟を頼ってしまうとは。あのときほど、他に腹を割って話せる人がいない己を恨んだことはなかった。

秋寅はすぐに上海から飛んできた。老若幼女——とはこの従弟の造った言葉だが——すべての女性に優しくというのが、彼のモットーである。つまり従弟は、丑雄ではなく

妻を氣遣ったのだった。

彼は開口一番、こう言った。

「いやー、鬼の霍乱^{かくらん}ってやつだね！ 国外から飛んできた従兄^{じゆうけい}想いな俺のこと、これからはもっと大事にするといひよ。たとえば、そうだなあ。伊緒里ちゃんの妹を俺に紹介してくれるとか！」

これで俺と従兄^{じゆうけい}さんも兄弟！

と、さも名案を思いついた風に言った秋寅を渾身の力で殴りつけて、丑雄はそのまま意識を失った。最後に見たのは、満面の笑みを浮かべたまま吹っ飛ぶ彼の姿だった。そのまま悪夢にしまいかけたが、夜に目を覚ますと頬を腫らした従弟はちゃっかり伊緒里の手料理を食べていた。とりあえずもう一発殴ろうとしたところ、また倒れられても困ると妻に止められた。

だが——認めたくはないが——常に騒がしい従弟のおかげでいくらか気が紛れたことも事実ではあった。暗い顔をしてるより、怒ってる方が従兄^{じゆうけい}さんらしくていいよ。そう言った彼の苦笑を思い出すに、もしかしたら気を遣って道化を演じていたのかもしれないかった。

(いや、まったくの気のせいだということも有り得るが……)

昔から、あの従弟の考えていることは分らない。

辰史が生まれる以前まで、秋寅はどこにでもいる子供だった、と思う。辰史に後継者としての才覚が表れ始めてからは、長男としての責務から解放されたような振る舞いが目立つようになった。一方で、兄らしくあろうと努めていたようでもある。

ようである——と秋寅のことを語るとき多少曖昧（あいまい）になってしまふのは、思春期を彼と疎遠にして過（すご）したためであつた。

片や才ある傍流（ぼうりゅう）の長男、片や才のない本家の長男。比べられ続け、先に音（おと）を上げたのは正義感の強い丑雄の方だった。秋寅が跡継ぎとしての教育を諦められている一方で、自分ばかりが尊に師事しているという状況が後ろめたくてたまらなかつたのだ。

顔を合わせた折にはいつも通りあるまつたが、それすら避けようと丑雄は尊の後を付いて回つた。当時から、秋寅が祖父を敬遠していたことは知つていた。高校生当時の三年前後をそうして過（すご）し、再び氣詰まりのない付き合いができるようになったのは、秋寅の進路が決まつてからだった。

あの従弟は実家から通うことのできるごく一般的な大学に進学した。自分と同じ、皇（み）明館（めいかん）大学の教育神学部に進学するのだろうと思つていた丑雄はそれを聞いて驚いた。理由を訊（き）いても、彼はいつものようにへらへらと笑うばかりだった。実家を出たくなかつ

たらしいとは、彼の妹の卯月（うづき）から聞いた。

同じく才がないことを責められて育つた三輪家の長女——初（はつ）子は、逆に大学進学を機に本家から離れている。秋寅も同じようにするだろうと思つていただけに、その選択は不可解だった。数年後にようやく本音を聞き出したところによると、先に家を出た姉を快く思つていないとの話だった。

きょうだいを見捨てて、一人で逃げた姉。

秋寅がそんな言い方をしたことも、丑雄には意外だった。日頃は、決して女のことを悪く言わない従弟である。

そんな秋寅が家を出たのは、きょうだいの中では最後だった。卯月も地元の大学に進学したが、市子（いちこ）修行と並行するために別の親戚の家に居候（いさうこう）することになった。辰史も高校進学を機に家を出て、蛟堂（きょうどう）に住み込んだ。これには、高齢だった尊の意向もあった。そうでもしなければ、末孫（はつそん）の育成が間に合わなかつたのだ。

大学を卒業した秋寅は、もう実家には用はないと言わんばかりに上海へ飛んだ。あのへらへらした従弟が、尊に頭を下げて師を紹介してもらつたのだと聞いている。なにを思つて調（ち）薬（やく）士を目指したのかは知らないが、ともかく彼の才能は開花した。学び始めて三年でその世界では有名だった師を超えた——とは本人の談であるから、多少の誇張も

あるかもしれない。しかし実際に、師を亡くしてから独立した彼の評判は海を越えて聞こえてきていた。

そんなわけの分からない従弟に、丑雄は自分の知ったことを話した。才能のない長男として三輪家に虐げられてきた従弟にならば、この嫌悪も分かるだろう——と、その点において当時の丑雄は彼を信頼した。今思えば、あまりに浅はかだった。傲慢であった。思い遣りもなかった。

丑雄自身は、長く一族の恩恵を受けてきた身である。

どの口で一族への嫌悪を語るか、と秋寅が思ったとしても無理からぬ話ではあった。やはりなにを考えているのか分からない従弟は、同情した顔で相槌を打っていたが。

話を聞き終えると、一言——

「まあ、従兄さんの好きなようにしなよ」

と、そう言った。

内心で共感を期待していた丑雄は、少しだけ落胆した。

今思えば、それも自分勝手な期待だった。アルバムを返しておいてくれと頼んで、そのまま秋寅を帰らせた。以来、二人の間でその話題がのぼることはなかった——というより秋寅が口を滑らせるたびに丑雄が激怒したため、辰季の話題そのものが避けられる

ようになった。

それからすぐに、尊が死んだ。

葬儀で彼の死に顔を見て、奇妙に安堵したことを覚えている。当然ながら、棺の中では彼は両目を閉じていた。もうその灰色がかった、なにもかも見透かす目を気にすることはない。見られることもない。

糾弾の機会は永遠に失われてしまったが、仮に尊が長生きしたとしても果たして向き合うことができていたかどうか。当時の心境を思えば、そのタイミングで祖父が亡くなったくれたことは幸いだった。もう責めるべき相手はいないのだと自分を誤魔化すことで、丑雄は一時の平穏を手に入れた。

参列する三輪家のきようだいたちの反応はそれぞれ違った。

無表情の初子に、綺麗に悲しげな顔を作った秋寅、不機嫌そうに俯く卯月に、目元を赤く染めた辰史。通夜振る舞いで長老連中の多くは辰史に話しかけたが、末の従弟は落ち込んで一言二言口を開いただけだった。三輪尊を崇拜していた一族の老人たちは、そんな辰史の態度にも心打たれたようだった。

——もしも『安達ヶ原』の一件がなければ、弟の死の真相を知らなければ、自分も同じように祖父の死を嘆くことができたのだろうか。

無意味であるを知りつつも、そう考えずにはいられたかった。

そのときも、それからも、辰史とは一言も話さなかった。彼の方も、丑雄には一瞥すら向けてはこなかった。そうして再び互いに別の道を歩み始めた。それからの八年は特に何事もなく過ぎていった。

その八年間は長かったような気もするし、あっという間だったような気もする。

結局のところ、尊を責めずに誤魔化してしまったことがよくなかったのだろう。丑雄は却って弟の死に囚われることとなった。やり場のない想いを抱えたまま、とにかく尊のようにはなるまいと誓い、丹塗矢家のよき当主であるよう努めてきた。蛟堂を継いだ辰史のことを気にかける余裕もなかった。いや、余裕がない風に振る舞ってきたのだ。一度気にかけてしまえば、あの従弟と尊とを重ねずにいられないだろうと、丑雄は自覚していた。

が、そうして更に自分を騙し続けるにも限度があった。

十年の絶縁状態を経たところで、状況はなに一つ変わらなかった。尊が死んでも、変わらなかった。辰史は相変わらず傲慢だった。報復屋としての経験を積んだ彼は、今や尊そのものである。

(いや、辰史の方がいくらか感情的ではあるか)

それは、自分も。

なんととはなしに先日の出来事を思い出してしまつて、丑雄は顔をしかめた。思念世界で、哀れな兄に拒絶された後、一つだけ調べたことがある。影に棲む狐と宿主の関係について——だ。分かったことは概ね、辰史の言っていたとおりだった。

(あいつの口ぶりでは、狐憑きはまだ死んでいないようだったが……)

幸いであつた、と言ふべきなのだろう。相性がよくない相手であるとはいえ、流石に殺してしまいたいとまでは思わない。一族に害を為そうとしていたわけではない、というなら猶更である。

(この件に片が付いたら、一応は謝罪に行くべきか。いや、しかし彼女が辰史と友誼を結んでいるとなると話がこじれるな。仇討ちとなると、伊緒里にも禍が及びかねん)

辰史との決着を前に、家を守る妻のことはなるべく考えないようにしていた。負けるつもりはないが、彼女のことを思えばどうしても決心が鈍る。なにも告げずに来てしまったことを、少しだけ後悔もしていた。

また、後悔。

過去に思いを馳せ、どれだけ慎重に現在を選び取ったとしても、未来に後悔をしないで済むことなどないのかもしれない。ふっとそんな思いに囚われてしまつて、丑雄は軽

くかぶりを振った。

(いかな。俺も、随分と弱い)

望んでいた決着を、怖れてしまうとは。先日、辰史の覚悟を垣間見たせいなのかもしれない。

——なあなあにするつもりはない。

従弟はそう言った。その台詞が、彼の決意を物語っていた。尊の後継者らしく、思念世界で決着をつけるつもりなのだろう。それも、道を違える原因となったあの『安達ヶ原』を使って。

(あいつも覚悟を決めた。もう、戻ることはできない)

その世界で、自分たちはどんな役割を果たすことになるのか。

自分と従弟とが当事者になろうとしている世界は、やはり想像しがたい。虚構と現実を関連づけて考えることは、尊に師事していた当時から苦手だった。ただ漠然と、どちらかがあちら側に残されるのだろうとは予感していた。

——こんなことなら、もつと遅くに来るべきだった。

妙な細工を仕掛けさせないために早く来ていたのだが、一人の時間が長引くほど意味もなく感傷的になってしまふ。あれこれと懸念することに意味はない。過去を思い返す

ことにも意味はない。今考えるべきは、思念世界での立ち回り方だけだ。いかに登場人物の影響を受けずに、丹塗矢丑雄として振る舞うことができるか。思念に呑み込まれてしまえば、敗北しかない。

或いは、どちらも思念の影響を受けなければ思念世界が崩壊するかもしれない。出口の確保という問題もあった。最後まで火雷が無事なら、然程の問題はないが——
鼓膜に微かな音が触れた。

それはコンクリートに反響して、二重に響いている。カッン……カッン……と。妙に勿体ぶって聞こえたのは、その靴音の主を知っていたからか。

自動ドアが取り払われてぽっかりと開いた入り口に、長身が佇んでいる。両手をポケットに突っ込んだ尊大な態度は、いつもと同じだった。丑雄は彼の名前を呼んだ。

「辰史……」

「よォ、従兄さん。随分と早いじゃないか」

親しげな応えとは裏腹に、辰史は敵意を剥き出しにしている。日頃の冷たさを思えば、過剰とも思えるほどだ。少しばかり、露骨でもあった。なにか企みでもあるのか——警戒しながら、丑雄は従弟の出方を待った。が、そんなこちらを嘲って、従弟は大仰にかぶりを振った。

「思念世界で決着を付けると言っただ。不意打ちをするような真似はしないさ」
 ぱちん、と指を鳴らす。ひび割れて中から鉄筋の覗いたコンクリ柱の陰から、一匹の蛇がするりと這い出した。青黒く輝く鱗を持った、目のない蛇——辰史の式神、地扶で
 ある。

地扶がカッと口を開く。顎の外れた口腔から現れたのは、丑雄にも見覚えのある木箱だった。辰史が少し体を屈めて、それを拾い上げる。

「ここまで来たら、もうご託を並べることに意味はない。問答だって、今更だ。何十回、何百回と繰り返ししたところでお前が俺の主張を受け入れることはないだろう。さっさと決着を付けようぜ」

その手が、木箱の蓋をずらした。中には忌まわしい鬼女の面が鎮座していた。あの事件の後、尊が回収していたのだろう。手入れでもしたのか、鬼女面はあの日よりいっそう美しく、また執念に包まれているようにも見えた。恐ろしい。

「ああ」

丑雄は動揺を押し隠して、壁際から離れた。早くしろ。とでも言いたげに、辰史が箱を突き出してくる。待たせている相手もないというのに、なにをそんなに急ぐ必要があるのか。従弟との距離を縮めて、恐る恐る箱の中身に手を伸ばす。ぎょろりと

目を剥く鬼女の頬あたりに。

二・時計の鰐とロストボーイ

今でもふとした瞬間に、頭の中で響くその音に怯えることがある。

忙しくも規則正しい、秒針が時を刻む音。それは鰐の腹から聞こえてくる。チク・タク・チク・タク。あきらがその音を怖れたのは、仲間たちを置いて永遠の時間から抜け出したから——片腕を食われた海賊と同じ、大人になることを厭わなかったからだ。た。

永遠の少年が紡ぐ物語。けれど、彼らは少年以外のなになることはできない。

そうと教えてくれたのは、天月比奈だった。思い出しながら、十間あきらは携帯電話を握る手に力を込めた。呼び出し音は、続いている。まだ三コール、いや、これで四コール。それほど長い時間が経ったわけでもないのに、もうずっとそうして彼女が出てくれるのを待っているような気がする。持ち込みも集荷依頼も少ないため次の配送まではしばらく時間があるが、それでも十分とは言えない。いっそ、仕事を放り出してしまおう

か……と、あきらは思う。

比奈は公休である。とはいえ彼女のマンションは営業所から近かったし、休みの日でも大抵は連絡が付くようにしているから、完全に仕事と切り離される日は少ないのかもしれない。今日がその数少ない日でないことを願いながら待つ。どうしても、連絡を取らなければならない。

発端は、常盤縁ときわみどりと蘇芳長春すおうながはるの話を立ち聞きしてしまったことだった。どちらも責任感が強いので、比奈の不在時には営業所を仕切っている。特に副所長を任されている常盤は比奈から信頼されていて、公私ともに親しくしているようでもある。だからこそ、その話を打ち明けられたのだろう。

三輪辰史と丹塗矢丑雄の決着に、比奈が介入しようとしている――

ぞつとするような話だ。彼女はつい先日、あの男に酷い目に遭わされたばかりではないか。時間はないが、止めなければならない。止められないまでも、話くらいは聞いておかねければならない。

(くそつ。おつさんは、なに考えてんだ……！)

どういふつもりか、あの報復屋は電源を切って電話に出ようともしない。

こういうときに比奈を巻き込むまいとするのが、あの報復屋ではなかっただろうか？

そうだったはずだ。少なくとも、あきらが知る限り――ここ一年ほどでは、そうだった。彼は誰より比奈に対して過保護だったし、過剰なまでに心配性だったはずだ。

あのときもそうだった。比奈と出会った日――

子供であることを免罪符めんざいふにしていた。仲間たちは楽しみのために永遠の子供であることを願っていたが、あきらは大人に希望が持てないという消極的な理由からそこに留まっていたのだ。仲間であり続けるためには、なんでもやった。大人に隠れて煙草たばこを吸ったこともあるし、酒を飲んだこともある。どちらも好きにはなれなかったが、仲間たちの前でそんな素振りを見せることはなかった。不毛な毎日が続いたが、そうした意味のないことの繰り返しで大人になっていくのだと割り切っていた。もしかしたら、そんな自分に酔っていたのかもしれない。

一方で仲間たちの心境は、また違ったようだ。狭いコミュニティの中で、彼らはいい気になっていた。大人よりも自由で、そして同じ年頃の子供たちより賢くて力もあるのだと誇っていた。

愚かな勘違いに気付かなかった彼らは、やがてその狭いコミュニティの中でもおどおどした無力な一人——つまり級友の一人に狙いを定めて、攻撃を始めたのだった。

暴行、恐喝、脅迫。

さまざまなやり方で、彼らは級友を追ひ詰めた。ありがちに「いじめ」という言葉を使うには、あまりに陰湿で卑劣だった。本人たちはパフォーマンスのつもりでもあったようだが、クラスメイトは誰一人として笑わなかった。笑えるはずがない。いつ、自分に矛先が向くとも知れないのだ。当たり障りなく躲し続けられた仲間たちは、むきになって行為をエスカレートさせていった。

流石に犯罪じみないじめに加わる気にはなれず、かといって彼らを諫めることもできず、くだらない輪の中から抜けることもできず——あきらは仲間たちから付かず離れずのところで、その光景を眺めていた。

担任の若い女性教師に、その問題を解決しろという方が酷な話ではあった。話も通じなければ、力でも敵わない年頃の少年たちを御すのは難しい。最初こそ彼らを諫めていたものの、次第に担任も体調を崩しがちになった。元より偏差値の高い高校ではなかったが、それにしても荒れきっていた。

そんな日常は、突如として終わりを告げた。

いつものように、仲間たちが級友を囲んでいた。そんな場面に偶然通りがかったのが比奈である。彼女の視線に気付いたとき、あきらは冷めた心地で予想した——あの女も、これまで見てきた通行人のように、なにも見なかったふりをして通り過ぎていくのだろう、と。同じように高をくくっていた仲間たちも、暴力を止めようとはしなかった。小突き回されていた級友でさえ、諦めきった顔でされるがままになっていた。

が、結果はまったく違った。何故なら、彼女は普通の人ではなかったからだ。

比奈は怖れる様子もなく、級友と仲間との間に割って入った。むっとした仲間の一人が彼女に手を上げようとしたが、次の瞬間、硬直したのは彼の方だった。彼の影は、ありえない形に蠢いていた。恐ろしい体験にでも遭ったように彼が震え出すと、瞬く間に恐怖は伝染していった。

今思えば、影に潜った御霊がなにかをしていたのだろう。

比奈は激昂していたようだから、もしかしたらその目は赤く光っていたのかもしれない——少し離れていたため、あきらには最後までなにか起こったのか分からなかったが——気付けば仲間たちは青い顔で戦意を喪失していた。

薄気味悪そうに逃げていく仲間たちの後を追うことも忘れて、あきらは呆然としてしまった。

先に話しかけてきたのは、比奈だった。彼女は一度目を瞑_{つぶ}って、
「今は恰好_{かっこう}いいと思えるかもしれないけど、この先ずっとアウトローを続けるって辛い
わよ」

と、冷えた鳶_{とびいろ}色の瞳を向けてきた。

叱_{しか}られたわけではなかった。罵倒_{ばとう}されたわけでもなかった。

けれどその言葉は、今まで耳にしてきたものより遥_{はる}かに辛辣_{しんろう}な響きを持っていて、胸に深く突き刺さった。考えないようにしていた未来への不安を見知らぬ女に指摘されて、あきらは逆上した。

「自分で助けてくれとも言えないような情けないやつを庇_{かば}って、ガキ相手にもっともらしい説教かまして、それで満足かよ。正義の味方ごっこは幼稚園児相手にでもやってろよ、おばさん」

それこそ、情けない八つ当たりだった。よくまあ、比奈に向かってそんなことを言ったものである。思い出すたびに、当時の自分を消してしまいたいと赤面するあきらだった。そのときの比奈も、恐らく苦笑していたのだろう。表情まではっきりと記憶しているわけではないが。

「袖摺_すり合うも他生_{たしょう}の縁_{えん}って言うでしょう？ 私も人に助けてもらって生きているか

ら、困っている人を見かけたら助けになりたいと思うだけ。お説教もね。あなたはさっきの子たちと違って、楽しくなさそうだったし——」

「そういうの、余計なお世話だったの。誰も助けてくれなんて言ってねえし、そもそも俺は困ってねえし。そのそいつだって、あんたが助けたから明日からはもっと酷_{ひど}くいじめられんだ」

悪態で返したあきらに、比奈はなにも言わなかった。敢_あえて無視をした、というよりはすっかり怯_{おそ}えきった級友のフォローを優先したようだった。道に散らばった持ち物を手早く掻_かき集め、服に付いた泥を払い、彼に酷い怪我がないことを確認すると、タクシーを掴_{つか}まえて病院で診断書を書いてもらうよう指示したのだった。あきらはなんとなくむつとしながら、その光景を眺_{なが}めていた。助言などしてもらったところで、自分たちのような子供が事態を変えられるはずがない。中途半端に手を出すくらいなら、最初から無視すればいいのに——と、そんなことを考えていたような気がする。

もしかしたら、その強_がりと脅_{おど}しが級友に報復を決意させたのかもしれない。

それから、級友は学校に来なくなった。

仲間たちは不登校になった彼のことを笑い、そのうち学校も退学するだろうという話で盛り上がっていた。仲間たちと、彼らの目に留まらないように息をひそめるクラスメイ

トたち——生贄はいなくなつた。次の標的にされるのは誰かと、怖れていたのだ——そのどちらからも少しだけ距離を置きながら、あきららは胸の内では比奈の言葉を反復せずにはいられなかった。

くだらない日常を経て、いつかは普通の大人になるのだらう。

そう漠然と考えていただけに、突如として目の前に、変わることもない未来^{ミライ}を突き付けられて、不安が胸にのしかかつてきた。言葉の刺^{とげ}を抜くこともできず、陰鬱^{いんうつ}な日々を過ごした。ふとした瞬間に、彼女を問い詰めてみたいと思うこともあった。

教師ではない。親でも、身内でもない。ただの他人が日頃なにを考えているのか、狭い世界で得意気^{とくいげ}になつている子供の振る舞いを、未来像をどう見ているのか、知りたくなつたのだ。

彼女と再び会つたのは、級友が不登校になつてから十日後だった。

放課後。いつものたまり場に、それは突然やつてきた。犬のような狐のような、とにかく四つ足の、黒い獣^{けもの}だった。影だった。影は口に咥えていたなにかを、あきらたちの輪の中にぽいと放り投げて、現れたときと同様に音もなく消えたのだった。

そのとき起こつたことを、言葉で説明するのは難しい。頭の中をかき回されて、無理やり中身を引き摺^ずり出されるような不快感があった。気付くと、あきらたちは見知らぬ

場所にいた。夜空と時計台が見えたような気がしたが、それも一瞬にして消え去つた。

耳の奥に鐘の音。その余韻^{よゐん}も残っているうちに、景色はがらりと変わつていた。

柔らかな陽射^{ひざし}で淡く色付く、雲の上。そう、我に返ったときには雲の上だった。誰に教えられるでもなく、そこが永遠の島——ネバーランドであることは分かった。仲間たちは初めこそ混乱していたものの、やがてそれぞれが好き放題に振る舞い始めた。そこは自由を求める少年たちにとって、夢のような島だった。小さな妖精が纏^{まと}う魔法の粉で、どこへでも飛んでいくことができる。海賊という名の大人をどれだけ痛めつけたところで、文句を言う者もない。森では妖精たちが、集落ではインディアンが、入り江では人魚たちが、少年らを歓迎し讃^{たた}えるのだ。

いい気になる仲間たちを横目に、あきらだけがなんとなく居心地の悪い思いをしていった。

仲間たちが世界に溶け込むにつれ、海賊との抗争は熾烈^{しれつ}になつていった。決戦のときは訪れ、髑髏^{どくろ}の旗と巨大な砲台を載せた海賊船——ジヨリー・ロジャー号でキャプテン・フックと対峙した。

これがまた、大人の嫌なところを凝縮^{ぎようしゆく}したような男であった。

傲慢で、威圧的で、鼻持ちならない。小馬鹿にされた仲間たちは激怒したが、彼を前

に手も足も出なかった。所詮は子供の浅知恵だと言わんばかりに、狡猾な彼を前に為す術もなく捕らえられた。リーダー格だった仲間が縄で縛られたまま海に突き落とされうになった、そのとき――

音が聞こえた。秒針が時を刻む音だ。それは鰐の腹から聞こえてきた。人の味を覚えた鰐。大人の味を占めた鰐。仲間たちは鰐の乱入を喜んだ。

しかし何故か、あきらはフックに感じた以上の恐怖をその鰐に抱いた。

鰐はフックを呑み込んだ。あきらの仲間たちは意気揚々とジョリー・ロジャー号を奪取して、ネバーランドを抜け出した。永遠の島を捨てたわけではなく、老いに支配された哀れな世界を冷やかそうと思いついただけだった。ところが、愕然としたのはあきらを含めた少年たちの方だった。

冷やかそうにも、元の世界とよく似たそこにあきらたちを知る者はいなかった。

皆、大人になっていく。高校を卒業し、大学や専門学校に進学し、或いは就職し、妻や夫となる人と出会い、それぞれの家族を作っていく。老いと秩序に縛られてはいるが、目まぐるしく変わる世界は穏やかで常に新しかった。変化のないネバーランドとは違った魅力があった。外から見て初めてそのことに気付いたあきらたちは、焦ってかつてのクラスメイトたちに話しかけたが、彼らを覚えている者はいなかった。少年たちだけが、

すべてのものから取り残されていた。

ネバーランドへ戻る道すがら、会話はなかった。戻ってから、以前のようにはしゃぐことはできなかった。海賊もいなくなり、後にはただ平和なだけの退屈な日常が残った。初めはなにもかもが珍しかった不思議な世界も、長く過こせば目新しさなどなくなっていた。

刺激はない。相変わらず少年たちを讀める者しか存在しない。時の止まった世界で、少年たちは仲間割れを始めた。二つの派閥に分かれて争う一方で、派閥内でも私刑は絶えなかった。けれど、どうしてか死ぬことはなかった。殺伐とした輪の中で自分の身だけはどうか守りながら、あきらは切に願った。

この世界から、出してくれ！ 誰か、助けてくれ！

その瞬間、世界はぐると景色を変えた。揺らぐ空間の中に、一人の男が立っていた。

キャプテン・フック――報復屋――三輪辰史。

彼はあきらたちに契約を突き付けてきた。法外な契約金を支払い、依頼者が提示した条件を呑むことで現実世界に戻るか。または、このまま思念世界に残るか。

仲間たちは随分と迷っていたようだが、ついには交渉に応じなかった。大企業にでも就職しない限りは、何十年と支払い続けなければならないほどの借金を負う――現実世

界に戻ったところで、それこそ残りの人生を棒に振りかねない。彼らは報復屋を散々に罵倒し、契約書を破り捨てた。

ただ、あきらは違った。

契約書を手にしたまま硬直し続けるあきらに、報復屋は目敏く気付いて問いを投げかけてきた。

「で、お前は どうする？」

「俺は——」

永遠に時の止まった世界で過ごすか。

人生を棒に振って、泥まみれになりながらも生き続けるか。

猶も迷うあきらに、報復屋は渋々といった風に口を開いた。今思えば、少しくらいは比奈からこちらの話を聞いていたのかもしれない。それを確認したことはないが。

「……忠告を無駄にするな。お前らみたいなガキにとつて世話焼きな大人ほど鬱陶しいものはないだろうが、気にかけてもらってるうちが花だと思えよ。そんなお人好しにまで相手にされなくなったら終わりだからな。もう、誰も耳を傾けてはくれなくなる」

彼は皮肉っぽく笑ってこうも言った。

「それに、お前はピーター・パンになれるタイプじゃアないだろう？ ウエンディに手

を取られて現実に戻った方が、きっと後悔しなくて済む。ずっと迷子ロストボーイを続けるつてのは辛いぞ」

「あんたも……」

彼女と同じようなことを言うのか。

とは、あきらは言葉にしなかった。代わりに覚悟を決めて、契約書にサインした。他の仲間も皆、向こう側に残った。契約書から顔を上げるより早く、乾いた音が鼓膜に響いた。報復屋が手を叩いたのだらう。仲間に別れを告げる暇さえ与えてはもらえなかった。もつとも、彼らとなにか一言でも会話を交わしていたら自分の選択を後悔してしまっていたのかもしれないが。

意識を失う直前に、報復屋の仏頂面ぶつぽんづらが見えたような気がした。浅く刻まれた眉間の皺みけんの意味を、あきらは知らなかった。その頃よりも少しだけ報復屋のことを知った今なら、分かる。

辰史は金に汚く、自分の才能を、非凡さを誇っている。口ではすぐに他人を馬鹿にするし、無遠慮で、無神経で、傲慢である。しかし、非情にもなりきれないのだ。眉間の皺は、彼が人間らしい心を持ち合わせていることの象徴だった。恨みという感情を誰より理解し、人の報復行為を認めている——一方で、そうした方法でしか心の闇を晴らす

このできない人や、道を誤ったまま戻ることのできない人を憐れんでもいる。

だから気に入らないのだ。嫌みなやつだ、とあきらは思う。

現実に戻ると、傍らに女の姿があった。比奈だった。彼女はずっとそうやって、うつつのあきらを見守っていたようだった。仲間たちの姿はなかった。

——彼らはどうなったのか、どこへ行ったのか。

訊ねるあきらに、比奈は答えた。契約を拒んだ仲間たちは新たなピーター・パンとして、迷子たちとして、ネバーランドに残った。現実の世界に戻ってきたのは、永遠の世界に飽きたかつての子供たちだ。

「あなただけが、戻った」

そう呟いた比奈の顔が、ほんの少しだけ嬉しそうに見えたことを覚えている。どこか悲しげであったことも。そんな彼女に、あきらは訊いた。訊かずにはいられなかった。

「……なあ」

「うん？」

「……大人って、楽しいか？」

——あなただけ。

比奈の言葉が、急に現実として襲いかかってきたのだ。今まで行動を共にしていた仲

間たちと違ってしまった。その選択は本当に正しかったのか？ 後悔しそうになった。

不安で堪らなくなった。だから、誰かに——彼女に、肯定してもらいたかったのだ。間違っていない、と。

比奈は少しだけ考える素振りをした。

「うーん。楽しいことだけ、面白いことだけ。辛いことのまったくない世界は無味乾燥じゃない？ いつかはそれが当たり前になって、幸福の価値もなくなってしまうのよ。

子供だからとか、大人だから、とかじゃなくて、変化のある世界で生きていけることが幸せなんだと思う」

「あんたは……あんたは、どうなんだ」

返ってきたのは、はにかむような微笑みだった。答えを聞くまでもない。

幸福そうな比奈を、あきらは純粹に羨んだ。自分にも、彼女の言う「幸福の価値」の分かる日がくるのだろうか——と、その疑問を口に出した覚えはなかった。だが、察しつたらしい比奈は肯いた。

「大丈夫。あなたはこうして、一人でも帰ってきたんだから」

「……………」

「諦めるよりも、償うことを選ぶ方が難しい。それを、あなたは誰に言われるでもなく

選んだのよ。私も同じ選択を迫られたことがあったけど、あなたのようににはできなかった。親身になって、逃げるなど言ってくれる人がいて、ようやく戻ってくる事ができた」

「俺だって同じだ。あんたに言われた。だから、決めた。じゃなきゃ、あいつらと同じだった」

アウトローを続けることは辛いと言ったのは、彼女だった。袖摺り合うも他生の縁だと言って、説教をしてくれたのも彼女だった。声を詰まらせながらも告げれば、比奈は驚いたようだった。それから彼女は少しだけ照れた顔をして、誤魔化すように地面から一組の人形を拾い上げた。

永遠の少年と、大人になることを選んだ少女。手を繋いだ人形は、無垢な瞳をあきらに向けていた。比奈はそれをそつとあきらの腕の中に押し込むと、手に名刺を握らせた。「もしも困ったことがあったら、いつでも頼って。現実を選んだこと、後悔させたくないから」

「俺は、後悔なんかしない。あんたのせいにもしない。見くびらないでくれ」

「……あまり気負わないでね。誰かに支えてもらうことを、恰好悪いって思わないで」助言の意味は、それからすぐ痛感することになった。

中身が入れ代わってしまった仲間たちを見るたび、幻聴を聞くようになったのだ。時

計の音。そしてどこからか自分を見つめる、獐猛な大型爬虫類の視線。それは夢の中にも現れて、一人違う選択をしたあきらを責め続けた。

昼も夜も音と悪夢に苛まれ——その頃、間の悪いことに金貸しが借用書を送ってきた。改めて報復屋との契約料を見ると、その額の大きさに戦わずにはいられなかった。

あきらは不安定だった。いつでも苛立ち、見えないなにかを怖れていたし、不安も抱えていた。事件から二週間ほども学校に通った頃には、すっかり孤独になっていた。

傍から見てもおかしくなっていたのだろう。教師は、両親に病院の受診を勧めたようだ。そんな話が広まって、ますます学校にいづらくなった。あきらは高校を中退した。同じ頃、中身の入れ代わった仲間たちも学校を退学になった。ネバーランドでの暮らしに慣れてしまったピーター・パンと迷子たちにとって、学校生活は窮屈すぎたのだ。その後、彼らがネバーランドに帰ると周囲に漏らして行方を眩ましてしまったことを風の噂で聞いた。そんなあきらたちと入れ代わるように、級友が再び登校するようになったらしいことも。

母親はなにも言わなかった。妹は、あきらと顔を合わせようとしなかった。ただ普段大人しい父親だけが、将来のことをよく考えるようにと告げてきた。養ってやれるのは二十歳までだとも。

将来のこと、と言われてもどうすればいいのか分からなかった。一連の事件を家族に話したところで信じてもらえとは思えなかったし、まして七桁にも上る借金のことなど相談できるはずもなかった。

途方に暮れたあきらは、ようやく比奈を頼る気になった——それまで意地を張っていたわけではない。あまりに、急にきたのだ。今までのつけが。彼女のことを思い出している余裕もなかった。

藁にもすがる気持ちで、名刺に書かれていた住所を訪ねた。

そのとき営業所にいたのは蘇芳で、彼はあきらの様子を見るとすぐに配送中の比奈を呼びだした。彼自身は休憩時間だったらしいが、そんなことはおくびにも出さずに残りの配送は代わるというようなことを彼女に告げていた。戻ってきた比奈も、あきらを責めたりはしなかった。

蘇芳の入れたコーヒーが、やけに苦かったことを覚えている。比奈が控えめに笑って、少し甘いカフェオレを作り直してくれたことも。

事情を説明しながら、あきらは不覚にも泣いてしまった。両親も妹も鬱陶しいばかりだと思っていたが、二十歳までという期限を突き付けられ初めて家族に甘えていた自分に気付いたのだ。

他人の優しさを嘔みしめながら思ったことは、比奈にまで見捨てられたらもうどうにもならなくなってしまうということだった。気付けば頭を下げていた。雇ってくれと、すがり付いていた。比奈は少し困った顔をしていたが、あきらを突き放したりはしなかった。

「じゃあ、まずはバイトってことかな。うちの仕事は特殊だから、十間くんには辛いかもしれないし。他にいい仕事がないか一緒に探しながら、頑張りうか」

それから彼女は金貸しに連絡をつけると、返済が長引いて利子が嵩むのも可哀想だからといって一括であきらの借金を払ってくれた。あきらは稲荷運送で働きながら、肩代わりしてもらった分を少しずつ比奈に返していくことになった。そのために、比奈が報復屋との間で立てていた返済計画が狂ったことは少し後に知ってしまった。男が比奈の恋人であることを知ったのも、同じ頃だった。

現実世界で会った報復屋は、思念世界で見たよりもいっそう尊大だった。我儘で大人げなかった。

「まったく、比奈の人のよさには呆れるぜ。急に返済計画を組み直してくれ、なんて言うから何事かと思えば、こんなこの馬の骨とも分からないガキのために預金解約してやったとか」

「本人の前で、やめてください。お小言は二人のときに、いくらでも聞くので……」
 「いいや、言わせてもらうぞ。お前、初めからこいつのことを随分と気に掛けていただろう？ それも気に入らなかつたんだ。助言だけだつて不公平なのに、雇つた挙げ句に借金の肩代わりまでしてやって、俺には事後承諾——」

「助言というか、確かに声はかけましたけど。依頼前の話ですよ」

「雇つたのは？」

「人手不足なんです。バイトを募集しても、男性は社長が追い返してしまうので」

「借金——」

「すみません。それだけは、勝手なことをして迷惑かけたつて思っています。もし支障があるようでしたら、神山さんにお借りして辰史さんの方には前倒しで返しますから」

「いや、金の話じゃねえよ。お前に無理やり返させたいわけでもない。だからこそ、最初から神山を介さなかつたんだ。ただ、お前がそこまで親身になってやるようなことかつて俺は……」

機嫌の悪い彼に睨まれて、あきらは蛇に睨まれた蛙のような気分だった。比奈にまで見放されてしまったら、そう考えると酷く落ち着かなくなつた。無意識に、祈るように手を組んで比奈を見つめる。と、彼女はあきらを見て少し懐かしむような顔をした。

「私、考えたんです。もしも私がこの子と同じような状態で誰の助けもなく生きていかなければならなかつたら、どうなつていたのかつて。大学を辞めて、仕事を探して、お金を返すだけの生活でも、生きていただけかもしれませんと思えたのか。或いは、向こう側に残ればよかつたと後悔していたのか——今の私は、そんな曖昧な想像しかできない。それは辰史さんが絶対に後悔させないと言つてくれて、実際に後悔しないよう私を支えてくれたからなんです」

当時も今も、比奈の事情は分からない。——私も同じ選択を迫られたことがあつたけど、あなたのようににはできなかった。親身になって、逃げるなど言ってくれる人がいてようやく戻つてくることができた——思念世界から戻つた折に聞いた、その言葉がすべてだ。

ただ、彼女に逃げるなど言つた相手を予想することは難しくなかつた。

「他人事じゃないんです。自業自得だつて、突き放したくないんです。勝手に苦労して、後悔して生きたいとは思えないんです。この子をこちら側に引き留めたのは私だし、辰史さんにしてもらつたことを人に返すのが私の償いなんだとも思つたから」

そう言われてしまえば、報復屋もそれ以上ごねる気にはなれなかつたのだろう。「お前も変なところ生真面目っていうか、頑固だよな」